

## サパタ・イ・メンドサ 『高貴なるトラスカラ市の年代史』に関する一考察

井上幸孝

### はじめに

スペイン植民地時代のメキシコでは、先住民によって様々な歴史記録が残された。その中でもとりわけ植民地時代絵文書 *códices coloniales* と呼ばれるものと、先住民クロニカ *crónicas indígenas* と総称される史料群は多くの歴史的な情報を含む。前者は、征服後に作成されたメソアメリカの伝統に基づく絵文書である。1521年のメキシコ征服後、16世紀末ないしは17世紀初頭までヨーロッパ美術の影響を受けつつも、征服前の文書作成の伝統が継承され、特に歴史的内容の絵文書が多数残された。後者の先住民クロニカは、主に16世紀後半から17世紀前半にかけて、先住民の子孫（広義には混血者も含む）がアルファベットを用いてスペイン語や先住民語で書いた歴史書やその他の記録文書である<sup>1)</sup>。

以上のように、メソアメリカに伝統的な絵文書とアルファベット文字で書かれた史料の間に一定の区別を設けるのが一般的であるものの、時に両者を明確に区分することは難しい。例えば、「転記された絵文書 *códices transcritos*」と呼ばれる文書のように、双方の性質を併せ持つケースがある<sup>2)</sup>。また、アルファベット文書か絵文書かという形式面では異なるものの、シウアマトル *xiuhámatl* <sup>3)</sup> というジャンルで一括りもしくは一定の歴史叙述の手法の継続と見なすことのできる場合もある。征服以前の365日曆（シウポワリ *xiuhpohualli*）の暦年にしたがって歴史的な出来事を記したシウアマトルには、『ヴァティカンA絵文書』（別名『リオス絵文書』）や『テレリアノ＝レメンシス絵文書』に含まれるメシーカ人の歴史のように絵文書形式で記さ

れたものがある。しかし、その一方で植民地時代が進むにつれて、アルファベットを用いて記述された「年の書」も見られるようになった。

フアン・ブエナビントゥラ・サパタ・イ・メンドサ Juan Buenaventura Zapata y Mendoza (以下、サパタと略記) が 17 世紀後半に編纂した『高貴なるトラスカラ市の年代史 *Historia cronológica de la noble ciudad de Tlaxcala*』(以下、『年代史』と略記) は、そうしたアルファベット表記の年代記の一つである。本稿では、この年代記の舞台であるトラスカラに関する史料について概観した上で、『年代史』の記述内容を検討する。さらに、植民地時代メキシコの史料論という観点から、『年代史』が提示する問題についても指摘する。

## 1. 植民地時代トラスカラの歴史記録

15 世紀前半に成立した「アステカ王国」<sup>4)</sup> は、スペイン人が到来するまでの 90 年ほどの間に急速に版図を拡大した。その支配は、メキシコ中央部とその周辺のみならず、メキシコ湾岸のワステカ地方から太平洋岸の現ゲレロ州、さらには南部のオアハカ、チアパス地方やソコヌスコ (現メキシコ・グアテマラ国境付近) の一部にまで及んだ。とはいえ、比較的近隣に位置しながらその支配下に入ることのなかった地域もあった。そうした主要な「独立国」の一つが、テノチティトランから 100 km ほど東に位置するトラスカラ地方である。メキシコ盆地の東側のプエブラ=トラスカラ盆地に位置するトラスカラは、政治的にはオコテルルコ、キアウイストラン、ティサトラン、テペティクパクという 4 つの首長領の連合体であったとされる。1519 年にスペイン人が到来すると、トラスカラの人々は早い段階でコルテス軍と同盟を結び、1521 年のテノチティトラン包囲戦ではこれに協力した主要な先住民集団となった。

トラスカラの歴史に関わる情報源としては、いくつかの絵文書の存在が知られている。有名な『トラスカラ絵布 *Lienzo de Tlaxcala*』の他に、『テペティクパク絵布 *Lienzos de Tepeticpac*』や『コントランツィンコ絵文書 *Códice de*

*Contlantzinco*』、さらにはトラスカラの近隣に位置するワマントラで作成された『ワマントラ絵文書 *Código de Huamantla*』などがある<sup>5)</sup>。とはいえ、歴史的情報源としてのこれら絵文書類の利用はまだ十分になされていない。

一方、先スペイン期のトラスカラに関する情報源としてこれまで最も頻繁に参照や引用されてきたのは、ディエゴ・ムニョス・カマルゴ *Diego Muñoz Camargo* (以下、カマルゴと略記) がアルファベットで書き残したクロニカである。彼の『トラスカラ史 *Historia de Tlaxcala*』は、1870年に作者不詳の『かつてボトゥリーニ氏によって発見された、大部分がトラスカラ地方に関するメキシコ史の断片』として出版された後、複数の版が重ねられた<sup>6)</sup>。さらに、1980年代～1990年代には、カマルゴが残したその他の文書も出版されている<sup>7)</sup>。

それ以外に様々なトラスカラに関する史料の存在も知られている。例えば、16世紀半ばにトラスカラ出身のタデオ・デ・ニサ *Tadeo de Niza* が征服に関するクロニカを残したことがわかっている。彼のクロニカそのものは現代に伝わっていないものの、他の記録者が情報源として用いたことから断片的な情報を得ることができる<sup>8)</sup>。絵文書やクロニカ以外のまとまった史料としては、1980年代にナワトル語のトラスカラのカビルドの記録が出版されたほか、1547年から1567年の議事録が公刊されている<sup>9)</sup>。また、トラスカラ州の文書館に保存されるナワトル語の訴訟文書なども編纂・刊行された<sup>10)</sup>。さらに、1995年にはサパタがナワトル語で書いた『年代史』が公刊され、2010年には、プエブラのものとおわせて別のナワトル語のトラスカラの年代記も出版されている<sup>11)</sup>。

こうした様々な史料や研究成果の出版の結果、半世紀ほど前と比較すると、征服前後のトラスカラの歴史を研究する史料、とりわけ公刊史料は、現在までに質量ともに飛躍的な変容を遂げた。数十年前には研究者にすら知られていなかったり、アクセスが困難であったりした史料が現在では容易に研究者や読者の目に触れるようになった。

しかし、一定のまとまった文書ないしは史料群が出版されても、ただ単にそれらを衆目に触れさせることが研究の最終目的というわけではない。最終的には、多くの研究者がそれらを利用し、個々の史料批判や史料間の照合を

深めていくことが不可欠である。多くの史料が出版された現在、さらなる新史料の発掘と並んで最も必要とされるのは公刊済みの史料を批判的に検討したり読み込んだりすることであろう。このような問題関心にに基づき、以下では、サパタと『年代史』について簡潔にまとめた後、この記録を読み直し、そこに見られる記述について改めて検討する。

## 2. サパタと『年代史』

『年代史』の作者であるサパタについては、レジェス・ガルシアとマルティネス・バラクスによる研究のほか、近年ではタウンゼントやマクドノーらの研究がある<sup>12)</sup>。その出自や生涯について十分に解明されていない部分もあるものの、これらの研究成果に基づきながらサパタがどのような人物であったのかをまずは見ておくことにしたい。

サパタは 17 世紀初頭に生まれた。祖父ブエナビントウラ・サパタはキアウィストランの要人で、祖母マグダレナ・デ・メンドサはティサトランもしくはキアウィストランの出身だったと考えられる<sup>13)</sup>。タウンゼントは 16 世紀のトラスカラのカビルド議事録にサパタ姓の人物が見当たらないことを指摘しているが、実際、カビルドの記録にサパタ姓の人物が登場するのは 1605 年以降のことである<sup>14)</sup>。他方、1560 年代にはメンドサ姓の人物（フランシスコ・デ・メンドサ）が存在したことが確認できるが、サパタの母方の家系との関連は不明である<sup>15)</sup>。

サパタの祖父および父はトラスカラで要職に就いた。祖父のブエナビントウラ・サパタは 1619 年、アルカルデ在職中に死去したことがわかっている。キアウィストランのレヒドールを務めた父ファン・サパタは 1641 年の疫病の流行の際にサパタの母とともに死去している<sup>16)</sup>。

祖父および父と同様、サパタもトラスカラで要職を歴任した。1645 年に初めてレヒドールとなり、その翌年にはアルカルデに選出されている。1651 年には統治官（ゴベルナドールもしくはフェス・ゴベルナドール）を務め、その後も複数回レヒドールとなった。このように重要な役職に就く一方、

1650年代に『年代史』の編纂を開始した。

『年代史』によれば、1685年の記述に登場するサパタ本人は「老人(huehuetzin)」であり、おそらくは1688年に死去したと考えられる<sup>17)</sup>。しかし、サパタの死によって『年代史』の編纂は中止されたわけではなかった。サパタと同時期にトラスカラの統治に携わったベルナベ・アントニオ・デ・サラサールの息子、マヌエル・サントス・イ・サラサール(以下、サントス・イ・サラサール)が1689年以降の記録と全体に及ぶ大幅な追記を主にスペイン語で行った<sup>18)</sup>。サントス・イ・サラサールは1715年に死去するが、少なくとも1703年まで『年代史』の原稿を管理していたことがわかっている。

サパタが編纂し、サントス・イ・サラサールがその作業を継続した『年代史』の存在は、研究者の間でも以前から知られていた。1952年に『16世紀のトラスカラ』を著したギブソンは、巻末の文献案内でこの史料に言及し、主に書誌学的情報をまとめた上で、「16・17世紀のトラスカラの歴史にとって極めて価値のあるものだが、日付に関しては全く信用できない」と述べている<sup>19)</sup>。また、ロックハートは1992年の『征服後のナワ人』の中でサパタについて簡潔に扱い、17世紀後半という遅い段階での編纂者としての彼の役割や、彼のナワトル語の特徴について考察している。ロックハートはサパタが古い史料を参照したものの「サパタの史料について我々はもっと知る必要がある」こと、ただ伝統を継承するのではなく、「彼の同時代の他の作者たちよりも古の人々の現実にはるかに近かった」ことを指摘している<sup>20)</sup>。

### 3. 『年代史』の記述と情報源

まず、先スペイン期について『年代史』で叙述されている内容とその情報源について見ることにしたい。『年代史』を構成する602のパラグラフ<sup>21)</sup>のうち、先スペイン期を扱う最初のセクションは冒頭の40ほどに相当する<sup>22)</sup>。最初に年号が記されているのは1524年(パラグラフ48)で、この年はフランシスコ会の「十二使徒」到来の年に当たる。実際、この箇所ではマルティン・デ・バレンシアへの言及が見られる。その少し前(パラグラフ44)には、

コルテスの到来と、シコテンカトルやマシスカツィンら要人の洗礼についての記述があるが、年号は記されていない。つまるところ、この部分では1524年以前について暦年ごとの叙述はなされていない。

まず、パラグラフ1~18では、トラスカラに人々が到着する以前の経緯が叙述されている。最初のパラグラフは次のように始まる。

チチメカ人がやって来た時について、言われ、語られているのは、彼らがチコモストク [七つの洞窟] から到来した、そこから降りて出てきたということである。導いてきたのは、セ・テクパトル [1・火打石の刀] という名の者だった。彼らはオコネネトルという場所でのみ休息をとったなどと言う。(In iquac hualaque chichimeca mitohuan motenehua yécoque temoque quitlapan hualquizque Chicomoztoc. Huallayacanaya ytoca Çe tecpatl. Hoconenetl çan ocan moçehuique etc.)<sup>23)</sup>

チコモストクからやって来たトラスカラ人の先祖のチチメカ人は、テツココ湖に居を定めたメシーカ人と袂を分かち、テツココ近くの「テオブヤウトランと呼ばれる、コアトリチャンと水辺の間辺り (Teopuyauhtlan Cohuatl Ychan nepantla ni yn atepan)」に住んだと言う<sup>24)</sup>。この場所で彼らはトラスカラ人の守護神として知られるカマシュトレを祀る。カマシュトレについては「髭の生えた賢人、その髭は大したものだった (tlamatini catca tentzon hueyac yn itentzon)」のに加え、司教がするような頭飾りをしていたと言う<sup>25)</sup>。

これらチチメカ人は弓矢を携帯し、狩猟を行っていて、矢を上空に向かって放った時は鷲を仕留めるか、さもなければ落ちてきた矢がピューマやジャガー、蛇や鹿、あるいは兎や鶉などを仕留めた。彼らはそれらを焼いて食していた。

「メシーカ・テパネカ人 (mexica tepaneca)」もしくは「メシーカ・コルワ人 (mexica colhuaque)」は彼らを厭い、1・兎の年にポヤウトランで戦争を仕掛けた。しかし、チチメカ王のテクアニツィンはメシーカ人を打ち破り、生きていたメシーカ人をカマシュトレの生贄に捧げたと言う。その後、彼ら

はトラカテコロトル（鼻人間）の言葉に従い、東へと移動を始めた<sup>26)</sup>。

彼らはポボカテペトル山麓のアマケメカン（現アメカメカ）から、オコペトラユカン、クアウケチョラン、アトリシュコ（アトリスコ）、ティエカク、カルパン、ウエショツィンコ（ウエホツィンゴ）、さらにはチョルーラン（チョルーラ）、トトミワカン、クアウティトラン（クアウティンチャンか？）、テカルコ、オストティクパクを経て、テシュカラン（トラスカラ）にたどり着いた<sup>27)</sup>。

以上のストーリーについていくつかの点を指摘することができる。まず、有名なメシーカ人の移住譚と同様に、メシーカ人と絡んだ移住の話をつラスカラ人が持っていたことが確認される<sup>28)</sup>。部分的にこれと合致する移住譚はカマルゴの『トラスカラ史』でも述べられており、ナワトル文化圏の各集団がそれぞれ有していた起源物語をつラスカラの人々も持っていたことがわかる<sup>29)</sup>。とりわけ、移住の途中でメシーカ人と分かれて別の道を進んだという内容は、メシーカ人の移住譚の中でのミチュワケ（ミチョアカン人）の扱いとの相似が認められる<sup>30)</sup>。

とはいえ、ここで述べられているトラスカラ人の移住譚は、共通点こそあれ、カマルゴが述べているものとは細部において異なっている。例えば、移住経路のシロテペク（ヒロテペク）やテポツォトランはカマルゴには記載されているが、サパタは触れていない<sup>31)</sup>。トラスカラの名称は、カマルゴの記録ではテシュカルテペク **Texcalticpac**（「岩の家の地」）がテシュカラ **Texcalla** となり、さらにトラシュカラ **Tlaxcalla**,（「トルティーリャの地」）になったと説明されているが、サパタの記録ではテシュカラン **Texcallan**（「岩の家の地」）と表記されている<sup>32)</sup>。この記述は、タウンゼントが指摘しているように、サパタがカマルゴの記録を参照しなかったか、もしくは参照していたとしても、自身の記述には反映させなかった可能性を示唆する<sup>33)</sup>。

しかしながら、サパタとカマルゴがまったく異なる情報を元に、まったく筋書きの異なるトラスカラ人の起源の叙述をしたわけではないことにも留意しなければならない。この点に関して、ディアス・デ・ラ・モラは、共通の情報源の存在があったとする説を唱えているものの、トラスカラの起源譚の他の情報源とのさらに詳細な比較が必要であろう<sup>34)</sup>。

この問題に関連して、トラスカラを構成する4つの中心地に関する記述にも注意を払っておく必要がある。それら4つの中心地とはオコテルルコ、キアウストラン、ティサトラン、テペティクパクである。これらが先スペイン期トラスカラ地方の各地を支配していたという考えは、現在、広く受け入れられている。しかし、征服以前のこのトラスカラの政治体制に疑問を投げかける研究者もいる<sup>35)</sup>。『年代史』では、1331年にトラスカラに人々が到達した後、オコテルルコ、キアウストラン、ティサトランそれぞれのトラトアニへの言及があり、スペイン人がやって来た1519年段階の記述にはトラスカラの「4人のトラトケ (nahuitin tlatoque)」への言及がある<sup>36)</sup>。すなわち、これら4つがトラスカラの中心を成すという認識は、カマルゴと共通している。

一方、『年代史』において移動や移住の経緯で登場する地名については、『無名メキシコ人の記録 *Anónimo mexicano*』の第5章との関連が示唆される。レジェス・ガルシアとマルティネス・バラクスは、『無名メキシコ人の記録』の記述とサパタの記述は同一の情報源に基づいていると主張している<sup>37)</sup>。この文書はベニート・イツカクマクエチトリ(またはイツカクマクエシュトリ)という、フランシスコ会士の教えを受けた最初の世代の要人によるものとされる。確かに、ナワトル語の文面を比較する限り、直接に写したというよりは、同じ内容の二種の異なる表現と思われる箇所が多い<sup>38)</sup>。サパタがカマルゴの情報ではなく、この情報を利用したとすれば、ナワトル語で書かれていることからより信憑性の高い情報源と判断して利用した可能性がある。

その一方、カマルゴの記述内容との相違については、サパタが意図的にカマルゴの記録を利用しなかったためとも考えられる。その理由として、サパタの時代のトラスカラ要人の間にはメスティソに対する反感があった。『年代史』では、1608年の出来事の記述において、カマルゴの同名の息子(ディエゴ・ムニョス・カマルゴ)に言及している箇所がある<sup>39)</sup>。興味深いのはこの人物についてサントス・イ・サラサールが極めて厳しい評価を下していることである。

統治官ドン・ディエゴ・ムニョス・デ・カマルゴ。混血者でトラス

カラの高貴なるカビルドを最初に追い詰めた人物。94年目にして、ばかげた統治官のせいで、この初代統治官の野望とともに上述の都市の荒廃が始まった。

(governador don Diego Muños Camargo mestizo primer perseguidor del cabildo nobilissimo de Tlaxcala. A los noventa y cuatro años empesaron las ruinas de esta dicha ciudad con la ambición de este primer Gobernador por aver salido un idiota de Gobernador.)<sup>40)</sup>

上述の通り、サントス・イ・サラサールはサパタの原稿に追記を行った人物で、サパタと同時代を生きたオコテルルコの要人である。この引用文に見られるメスティソに対する嫌悪感は、サパタ自身も体験したものだと思われる。サパタによれば、1661年にニコラス・メンデス（もしくはニコラス・メンデス・デ・ルナ）という、ポルトガル人とトラスカラ人の混血の庶子がカビルドの構成員となり、1663年にはこの人物が統治官となった<sup>41)</sup>。その前年の1662年には、フアン・ニコラス・コルテスという人物が統治官に就任したが、サパタによればこの人物はテペティクパクの人物として数えられていたが、実際にはティサトランの人物でチアウテンパンに住み、金銭にものを言わせて職を得たとしている。この人物の統治官就任も、同じ年のニコラス・メンデスの書記官就任も、「4つのカベセラの貴族の同意なしになされた (amo ytecopa mochiuh y pipiltin nahui cabicera)」とサパタは述べている<sup>42)</sup>。

つまり、サパタ自身がトラスカラのカビルドで活動していた間、メスティソらが公職を金銭で買うような方法でカビルドに入り込む事態が起こっていた。こうした者たちの流入は、地元の貴族家系出身で、トラスカラの統治を担ってきたという自負を持つ従来の要人たちにとって要注目人物に映った。スペイン征服あるいはそれ以前からのトラスカラの歴史を記録し、次世代に受け継ごうとしているサパタにとって、こうしたメスティソの流入によるカビルドへの悪影響は17世紀後半に差し掛かったこの時に始めて起こったことではなかった。その最初の事例は、記録者カマルゴの息子がトラスカラの

統治官に就任した際に求められた。トラスカラの歴史をスペイン語で綴り、息子を統治官として送り込んだカマルゴに対するサパタの評価は否定的であったと推察される。

さらにパラグラフ 561 には、別の文書から転記された先スペイン期についての簡潔な叙述がある。この箇所はサントス・イ・サラサールが追記した部分であるが、「とても古いもの〔書物〕から転記された (omocopin ytech ocçe huel huehuetcayotl)」との注記があり、下記のような内容である<sup>43)</sup>。

トラスカラ人の祖先であるシパンテクトリ、テクイクトルツィンは、イスコロコ、トライロトラク、キアウストラン（原文ではキヤウティトラン）に居を定めた。その後、息子ショパンツィンが生まれ、その娘イピツィンはミスキトルと結婚し、ティルマを生んだ。シパンテクトリはチチメカパンで死んだ。テペティクパクの人々は別で、二人の人物がいた。一人はオコテルルコ人の先祖トスパンで、もう一人はコワテクトリといった。テペティクパクで会合が行われたが、オコテルルコのカマシュトレは参加せず、洞窟の入口に入っただけだった。その後、キアウストランでティマルテクイトリがトラトアニとなり、コヨテペトルの洞窟に入った。メシーカ人がトラスカラを征服しようとした時、彼らは盾をもって空を飛び、メシーカ人には火の雨が降った。

きわめて神話的な内容を含むと思われるこのテキストだが、編者のレジェス・ガルシアとマルティネス・バラクスはキアウストランの人々の詩歌の一部ではないかとしている<sup>44)</sup>。最後にメシーカ人に火の雨が降ったという記述があるが、神話的な出来事を指しているのか、先スペイン期における実際の戦闘なのか、あるいは 1519～21 年の征服戦争にかかわる内容なのかは不明である。

続いて、1331 年にトラスカラ人の先祖がトラスカラに到着した年から 1521 年のテノチティラン陥落までの年代記形式の記述に注目する（パラグラフ 72～129）。上で見たトラスカラ人の起源に関する叙述の後、いったんは征服直後（1527 年まで）の記述が見られるが、パラグラフ 70 からは再び時間を遡り、先スペイン期の記述内容になっている。1310 年から年代別に来来事の記述がなされており、征服を経て植民地時代の同様の記述へと続いて

いく。ここでは、1521年までの記述についていくつかの特徴を見ておきたい。

まず、自然災害などに関する記述が一定程度見られる。例えば1451（11・葦）年の数十センチの降雪、1454（1・兎）年から3年間続いた飢饉、1513（8・家）年のサワトル川の氾濫などである。自然現象や災害の記録は、先スペイン期から続けられていたことである。例えば、メシーカ人の歴史を記録した絵文書には、降雪、地震、飢饉、日蝕、彗星出現など様々な自然現象やその影響がシウアマトル形式の中に記載されている<sup>45)</sup>。この部分に関してはシウアマトルの伝統を受け継ぎ、こうした記録を残すことをサパタも必要と考えていたことが見てとられる<sup>46)</sup>。

次に、1331～1521年の記述で気がつくのは、テノチティトランのメシーカ人に関する基本情報が収められている点である。アカマピチトリからモテクソマ・ショコヨトル（モクテスマ2世）死去までが連続して記載されているが、クイトラワクとクアウテモクには言及がない。

チマルパインの年代記の記述（『第7報告書』および『日記』）のテノチティトランのトラトアニの即位年および没年と比較すると、サパタの情報源はチマルパインの情報源とかなり異なることが見てとられる（表1）。チマルパインの記録におけるこれらの情報は、主に『クロニカ・メシカヨトル』に拠っていると考えられ、いわばメシーカ王家の正史に属する伝統が情報源に基づいたものである。具体的に異なる点としては、初代ウィツィリウィトルへの言及の有無、アカマピチトリやウィツィリウィトルをはじめ複数のトラトアニの即位年・死没年の異同、クイトラワクとクアウテモクをトラトアニと見なすか否かといった点が挙げられる。これらの相違は、トラスカラ側の伝統的見解を『年代史』が取り入れたことによるのかもしれない。

『年代史』には、他の主要なアルテペトルのトラトアニについても比較的多く記録されている。例えば、テツココの場合、ネサルコヨトル以降、カカマの死までが途切れることなく言及されている。ウエシヨトラやクアウナワク（クエルナバカ）などについても他の情報源との比較を進めていく必要がある。

なお、これらの記述において、サパタによって記されている先住民の暦は基本的に数字部分が省かれている。例えば、「1・葦」なら「葦」とのみ表記

表 1 : チマルパインとサパタによるメシーカ王の即位および死去年

	チマルパイン	サパタ *1
ウェウエ・ウィツィリウイトル	1278(7・兎)～1299(2・葦)年 *2	[言及なし]
アカマビチトリ	1387(5・葦)～1387(12・葦)年	1361(2・家)～1404(3・火打石)年 *3
ウィツィリウイトル	1391(3・葦)～1415(1・葦)年	1404(3・火打石)～1417(3・家)年
チマルボボカ	1415(1・葦)～1426(12・兎)年	1417(3・家)～1428(1・火打石)年
イツコアトル	1427(13・葦)～1440(13・火打石)年	1428(1・火打石)～1440(13・火打石)年
モテクソマ・イルウィカミナ	1440(13・火打石)～1468(2・火打石)年	1440(13・火打石)～1469(3・家)年
アシャヤカトル	1469(3・家)～1481(2・家)年	1469(3・家)～1481(2・家)年
ティソク	1481(2・家)～1486(7・兎)年	1481(2・家)～1486(7・兎)年
アウイツォトル	1486(7・兎)～1502(10・兎)年	1486(7・兎)～1503(11・葦)年
モテクソマ・ショコヨトル	1502(10・兎)～1520(2・火打石)年	1503(11・葦)～1520(2・火打石)
クイトラワク	1520(2・火打石)～1520(2・火打石)年	[言及なし]
クアウテモク	1521(3・家)～1524(6・火打石)または 1525(7・家)年 *4	[言及なし]

\*1 サパタのメソアメリカの暦年はほとんどがシンボル(葦、火打石のナイフ、家、兎)のみが記されており、サントス・イ・サラサーールが数字を追記している。

\*2 チマルパインによれば、ウェウエ・ウィツィリウイトルは、テノチティトラン創設(1325年)前にチャブルテペクで即位し、クルワカン王のコシユコシュトリによって生贖にされた。

\*3 メソアメリカ暦の「火打石のナイフ」は火打石と略記した。

\*4 『第7報告書』では1524年だが、『日記』では1525年とされる。

出典: Domingo Francisco de San Antón Muñón Chimalpáin Cuauhtleuanitzin, *Séptima relación de las Diferentes Histoires Originales*, ed. de Josefina García Quintana, México, UNAM, 2003, pp. 28-215; Domingo Chimalpáhin, *Diario*, ed. de Rafael Tena, México, CONACULTA, 2001, pp. 150-167; Juan Buenaventura Zapata y Mendoza, *Historia cronológica de la Noble Ciudad de Tlaxcala*, ed. de Luis Reyes García y Andrea Martínez Baracs, México, Universidad Autónoma de Tlaxcala / CIESAS, 1995, pp. 106-132 をもとに筆者作成。

されており、1～13の数字部分は後にサントス・デ・サラサーールが補った情報である。先スペイン期の文脈であれば、数字を省くというのは意味をなさなかつただろう。だが、『プエブラ年代記』や一部の権原証書にもそうした表記が見受けられる<sup>47)</sup>。先住民暦の数字が示されていないことを「情報の欠如」と見なすのではなく、そのような表記の方法が植民地時代のどの段階でどの程度一般化していたのか(あるいは一部の文書だけの例外なのか)は、17～18世紀の記録全般の中で検討していくことが今後は必要となるだろう。

#### 4. 植民地時代の史料論の中での『年代史』

1521年のスペインによる征服後、アルファベットを使用した文書を先住民が作成し始めたのは、かなり早い時期だった。例えば、『トラテロルコ年代記』の作成年には諸説あるものの、1528年に書かれたとする説もある。これら初期の文書の多くは絵文書の情報に基づいて提供された内容をアルファベットに転記したものと考えられ、概ね作者不詳である<sup>48)</sup>。同様に、16世紀中に主に作成された植民地期絵文書も、ほとんどが作者不詳である。征服前だけでなく植民地時代に入ってから歴史を記録した『ヴァティカンA絵文書』や『テペチパン絵巻』のような絵文書には、作者名は記されておらず、先スペイン期と同様に匿名のトラクイロがこれらを描いたと考えられる。

アルテペトルの歴史を綴る文書に特定の著者名を残さないのが先スペイン期からの伝統であった一方で、征服から半世紀以上が過ぎ16世紀末から17世紀前半になると、先住民クロニカの「作者」が現れる。個別の検討は必要であるものの、クロニカに著者名が付されるのは概してヨーロッパから持ち込まれた概念の影響を受けた結果と考えられる。ナワトル語で『メシーカ人ならびに諸部族の到来の歴史』と『征服の歴史』を書いたクリストバル・デル・カスティージョや、スペイン語で『ヌエバ・エスパーニャの歴史（チメカ人の歴史）』などを書いたフェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトルは、一人称で著者としての立場を明確に示す文章を残している<sup>49)</sup>。

このことを念頭において『年代史』を見ると、確かにサパタと同時代の記述において、彼自身が一人称で語っている箇所がある。しかし、それと同時にサパタ以外の人物が一人称のテキストも含まれていることも無視できない。例えば、1617年の記述では、「サンタ・アナ・チアウテンパンで私ことセバステイアン・デ・ロサスがテニエンテになった（niteniente nimochiuato Santa Ana Chiauhtenpan nehuatl Sepastian de Rozas）」、1643年の記述では、「私アントニオ・ディエゴがエスクリバノとなった（Antonio Diego niescribano nimochiuh）」や「私ことアントニオ・ディエゴが筆記係であった（nehuatl Antonio Diego nizruiute）」といった箇所が見られる<sup>50)</sup>。さらに、既に述べたように、サパタがまとめた原稿にサントス・イ・サラサル

は大幅な追記を行っている。

『年代記』の原稿には、サントス・イ・サラサルが作成したと思われる表紙が添えられている。この表紙にはトラスカラ市の紋章が大きく描かれ、上部には「ドン・フアン・ブエナビントゥラ・サパタ・イ・メンドサによって彼の言語で書かれた、実に高名かつ高貴で忠実なるトラスカラ市の年代記 […] (Chronologia de la my Insigne, Noble y Leal Ciudad de Tlaxcala, escrita en su idioma por don Iuan Buenaventura Çapata y Mendoza[...])」といった文言が見られる。同じ表紙の下部には、「ドン・マヌエル・デ・ロス・サントス・イ・サラサル得業士 […] は、1689 年以降、その続きを書いた (El bachiller don Manuel de los Sanctos y Salazar [...], que la prosigue desde el año de 1689)」と記されている<sup>51)</sup>。

以上を考え合わせると、サパタが著者とされるものの、文中にはサパタよりも前の記録者、サパタよりも後の記録者による一人称の声も収められているということになる。クロニカに比べて一般に年代記(シウアマトル)には作者不詳のものが多く、『年代史』からは筆者自身の「個」に言及する習慣も徐々に浸透していた様子が窺える。16 世紀以降にヨーロッパ人がもたらした作者(著者)や編纂者などといった概念がメソアメリカでどのように受け止められ、先住民系の文書に影響を与えたかという研究はまだなされていない。この点において、サパタの『年代史』は先住民史料のあり方について従来にない観点からの考察を促してくれるものである。他の「作者不詳」の年代記やチマルパインの年代記的記述との比較を行うことで、メキシコ植民地時代の先住民史料論に新たな見方を提供することが可能になるだろう。

## おわりに

「歴史は現在の鏡である」などとよく言われるように、過去(歴史)と同時代(現在)が不可分という考えは、現代においても広く共有されている。ここまでの考察から、『年代史』は異なる二つのレベルにおいて歴史性がサパタにとっての「現在」に反映されたものであるとすることができる。

一つめは、サパタ自身を取り巻く社会的環境に関連して、彼自身の立場や基準で過去が取捨選択されているという点である。カマルゴに対する否定的な立場は、彼自身が直接に関わった同時代のメスティソに対する否定的なイメージが投影されたものと解され、同時代の個人的体験が歴史を記す上で史料を取捨選択する基準に影響を及ぼした可能性が示唆される。換言すれば、サパタ自身が生きた17世紀半ばから後半にかけてのトラスカラ要人の世界という同時代性が『年代記』の歴史記述には反映されている。

もう一つは、征服以前からメキシコ中央部のナワトル文化圏の主要集団であったトラスカラ人の中心を成す貴族としての歴史性である。スペイン征服以前の「記憶」が忘却の淵に追いやられぬよう、地元先住民エリートの一員として、年配者となったサパタは、古い史料を求め、そこに記された内容をまとめ直し、『年代史』を書いた。この点に関して、サパタはトラスカラの伝統を重んじる、もしくはそれをよく理解しようとする立場を取っていたと考えられる。この意味では、サパタは同時代のトラスカラ人全般よりも先スペイン期や植民地時代初期の伝統に寄り添う立場を示していたと言えよう。

これら二点をいわば縦糸と横糸として、サパタの『年代史』は作成された。植民地時代半ばを過ぎた段階で、時に「個」の形跡を残しながらもシウアマトルという形式やナワトル語での叙述にこだわったことは、上述の二つのレベルでの歴史性の共存を如実に示している。

筆者が実際に体験した出来事を綴っている同時代の記述を別にすれば、その内容は、後世にまとめ直されたものであり、厳密な意味で『年代史』は一次史料ではない。しかしながら、「真正な一次史料」のみを探し求めて実際に起きた出来事ばかりを突き止めることが歴史研究者の使命ではない。ある史料を書き記した人物や集団が、時に過去をどう解釈したり、同時代の事象や出来事をどう見ていたりしたのかも史料を前にした研究者が取り組まねばならない課題である。サパタがいかなる史料を用い、いかなる伝統に属する史料を重視したのかという点は、容易に結論が得られるものではないだろうが、今後も他の史料との照合をいっそう進める必要がある。

ロックハートは、サパタが「受け継いだ伝統のさらに先を行く真剣な努力をしたことは明らか」と評した<sup>52)</sup>。しかし、「伝統」自体にも同時代の状況が

大きく影響しているのは本稿で部分的に見た通りである。今後は『年代史』の記述の考察をさらに深めると同時に、「いずれチマルパインやテソソモクのように馴染みのある存在になるであろう」<sup>53)</sup> サパタが植民地時代先住民の歴史記述の潮流の中でどのように位置づけられるのかを考えていきたい。

謝辞 本稿は、JSPS 科研費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（領域代表：青山和夫）計画研究 A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」（代表：鈴木紀、JP26101005）の研究成果の一部である。

## 注

<sup>1)</sup> 先住民クロニカについては、以下の拙稿を参照。井上幸孝「植民地時代メキシコの先住民クロニカ（上）」、『専修人文論集』、第 88 号、2011 年、77～95 頁；同「植民地時代メキシコの先住民クロニカ（下）」、『専修人文論集』、第 89 号、2011 年、61～82 頁。

<sup>2)</sup> Silvia Limón Olvera, “Los códices transcritos del Altiplano central de México”, en José Rubén Romero Galván (coord.), *Historiografía mexicana, vol. I: Historiografía novohispana de tradición indígena*, México, IIH-UNAM, 2003, pp. 85-114; Silvia Limón Olvera y Miguel Pastrana Flores, “Códices transcritos con pictografías”, en José Rubén Romero Galván (coord.), *Historiografía mexicana, vol. I: Historiografía novohispana de tradición indígena*, México, IIH-UNAM, 2003, pp. 115-132.

<sup>3)</sup> 字義通りには「年 xihuitl」の「書 ámatl」を意味する。

<sup>4)</sup> テノチティトラン（メシーカ人）、テツコ（アコルワ人）、トラコパン（テパネカ人）の三都市同盟による支配体制を指し、それぞれの都市国家に王（トラトアニ）が存在した。

<sup>5)</sup> Alfredo Chavero (ed.), *El Lienzo de Tlaxcala*, México, Cosmos, 1979; Carmen Aguilera (ed.), *Lienzos de Tepeticpac. Estudio iconográfico e histórico*, México, Gobierno del Estado de Tlaxcala, 1998; *Códice de Huamantla. Manuscrito de los siglos XVI y XVII, que se conserva en la sala testimonios pictográficos de la Biblioteca Nacional de Antropología e Historia y en la Biblioteca Estatal de Berlín*, estudio de Carmen Aguilera, México, Instituto Tlaxcalteca de la Cultura, 1984.

<sup>6)</sup> *Fragmentos de historia mexicana pertenecientes en gran parte a la provincia de Tlaxcala descubierto en otro tiempo por el Caballero Boturini...*, Tlaxcala, Tip. del Gobierno del Estado, 1870; Diego Muñoz Camargo, *Historia de Tlaxcala*, ed. de Germán Vázquez Chamorro, Madrid, Historia 16, 1986; Diego Muñoz Camargo, *Historia de Tlaxcala (Ms. 210 de la Biblioteca Nacional de París)*, ed. de Luis Reyes García y Javier Lira Toledo, México, Gobierno del Estado de Tlaxcala/CIESAS/Universidad Autónoma de Tlaxcala, 1998.

<sup>7)</sup> Diego Muñoz Camargo, “Descripción de la ciudad y provincia de Tlaxcala”, en

René Acuña (ed.), *Relaciones geográficas del siglo XVI: Tlaxcala, tomo primero*, México, IIA-UNAM, 1984 ; Andrea Martínez Barracs y Carlos Sempat Assadourian (paleografía, presentación y notas), *Suma y epílogo de toda la descripción de Tlaxcala*. México, Universidad Autónoma de Tlaxcala/CIESAS, 1994.

<sup>8)</sup> タデオ・デ・ニサのクロニカは見つかっていないが、アルバ・イシュトリルシヨクトルが彼の書いた征服史に直接言及している。また、ニサの名は16世紀の各種史料にも登場する。Cfr. 井上幸孝「アルバ・イシュトリルシヨクトルに関する一考察」、『ラテンアメリカ・カリブ研究』、第3号、1996年、74頁；Thelma D. Sullivan, *Documentos tlaxcaltecas del siglo XVI en lengua náhuatl*, México, IIA-UNAM, 1987, pp. 112-113, 116-117ss; Chavero (ed.), *El Lienzo de Tlaxcala*, 1979, pp. iv-v.

<sup>9)</sup> Eustaquio Celestino Solís, Armando Valencia R. y Constantino Medina Lima (eds.), *Actas de cabildo de Tlaxcala 1547-1567*, México, Archivo General de la Nación/Instituto Tlaxcalteca de la Cultura, 1985; James Lockhart, Frances Berdan and Arthur J.O. Anderson, *The Tlaxcalan Actas: A Compendium of the Records of the Cabildo of Tlaxcala (1545-1627)*, Salt Lake City, University of Utah Press, 1986.

<sup>10)</sup> Sullivan, *op.cit.*

<sup>11)</sup> Juan Buenaventura Zapata y Mendoza, *Historia cronológica de la noble ciudad de Tlaxcala*, transcripción y traducción de Luis Reyes García y Andrea Martínez Baracs, México, Universidad Autónoma de Tlaxcala/CIESAS, 1995; Camila Townsend, *Here in This Year: Seventeenth-Century Nahuatl Annals of the Tlaxcala-Puebla Valley*, Stanford, Stanford University Press, 2010.

<sup>12)</sup> Luis Reyes García, “Las obras históricas de don Juan Buenaventura Zapata y Mendoza, el bachiller don Manuel de los Santos y Benito Itzcacmacuextli”, en *Coloquio sobre la historia de Tlaxcala*, Tlaxcala, Gobierno del Estado de Tlaxcala, 1998, pp. 153-160; Zapata y Mendoza, *op. cit.*, pp. 7-76; Camila Townsend, “Don Juan Buenaventura Zapata y Mendoza and the Notion of a Nahua Identity”, in Susan Schroeder (ed.), *The Conquest All Over Again: Nahuas and Zapotecs Thinking, Writing, and Painting Spanish Colonialism*, Eastbourne, Sussex Academic Press, 2010, pp. 144-180; Camila Townsend, “The Concept of the Nahua Historian: Don Juan Zapata’s Scholarly Tradition”, in Gabriela Ramos and Yanna Yannakakis (ed.), *Indigenous Intellectuals: Knowledge, Power, and Colonial Culture in Mexico and the Andes*, Durham, Duke University Press, 2014, pp. 132-150; Kelly S. McDonough, *The Learned Ones: Nahua Intellectuals in Postconquest Mexico*, Tucson, The University of Arizona Press, 2014, pp. 63-82.

<sup>13)</sup> レジェス・ガルシアとマルティネス・バラクスは、ブエナビントゥラをサバタの父としながらも、祖父だった可能性もあるとしている。本稿ではタウンゼントによるサバタの家系の再構成に従い、ひとまずこれら二人を祖父母と見なすことにする。Cfr. Zapata y Mendoza, *op. cit.*, pp. 16-18; Camila Townsend, “Don Juan Buenaventura de Zapata y Mendoza y la identidad nahua”, en Patrick Lesbre y Katarzyna Mikulska (eds.), *Identidad en palabras. Nobleza indígena novohispana*, México, IIA-UNAM, 2015, p. 216.

<sup>14)</sup> Solís, *et.al.*, *op.cit.*, pp. 423-424.

<sup>15)</sup> *Ibid.*, pp. 389ss.

<sup>16)</sup> Zapata y Mendoza, *op. cit.*, pp. 244, 252.

<sup>17)</sup> *Ibid.*, pp. 19, 610-611, 681-682; Townsend, “Don Juan Buenaventura de Zapata y Mendoza y la identidad nahua”, 2015, p. 242.

- 18) 父ベルナベ・アントニオは1660～1661年にトラスカラの統治官を務めた。息子のサントス・イ・サラサールも1680年代に統治官を務め、1710年から没年まではサンタ・クルス・コスカクアウアトラウコの司祭だった。Zapata y Mendoza *op. cit.*, p. 19.
- 19) Charles Gibson, *Tlaxcala en el siglo XVI*, México, FCE/Gobierno del Estado de Tlaxcala, 1991, pp. 249-250.
- 20) James Lockhart, *Los nahuas después de la conquista. Historia social y cultural de la población indígena del México central, siglos XVI-XVIII*, México, FCE, 1999, pp. 554-557.
- 21) 元の原稿では区切られておらず、出版に際して編者のレジエス・ガルシアとマルティネス・バラクスが便宜的に区切ったものであるが、ここでは出版されたテキストとの照合を容易にする目的でこの区切りを利用する。
- 22) 後述する通り、パラグラフ 70 以降に再び先スペイン期から征服後の歴史が扱われており、その部分は暦年ごとの出来事の記述がなされている。
- 23) Zapata y Mendoza, *op. cit.*, p. 82. 以下、『年代史』の引用は、ナワトル語・スペイン語ともに原文の拙訳で、訳者による補足や省略箇所は [ ] で示した。また、ナワトル語とスペイン語いずれについても ( ) 内に原文を付した。
- 24) *Ibid.*, p. 82.
- 25) *Ibid.*, p. 84.
- 26) *Ibid.*, p. 86.
- 27) *Ibid.*, p. 88.
- 28) 井上幸孝「メシーカ人の旅物語 —アステカ移住譚の形成と歴史」、専修大学人文科学研究所編『移動と定住の文化誌 —人はなぜ移動するのか』彩流社、2011年、15～42頁。
- 29) Muñoz Camargo, *Historia de Tlaxcala*, 1998, pp. 72-93.
- 30) メシーカ移住譚では、起源の地（アストラ）を出発した複数の集団の中にミチョアカン人も含まれていたとされる。トラスカラとアコルワカンとの関係については、その歴史的関係性を考えることも可能であろうが、メシーカ移住譚におけるミチョアカンとの関係と同様、同時代性に基づいて説明される過去の関連性という視点も必要と思われる。Cfr. Eduardo Corona S., “La relación acolhua-tlaxcalteca en su identidad histórica de formación”, en *Historia y sociedad en Tlaxcala. Memorias del Segundo Simposio Internacional de Investigaciones Socio-Históricas sobre Tlaxcala, octubre 1986*, México, Instituto Tlaxcalteca de Cultura/Universidad Autónoma de Tlaxcala/Universidad Iberoamericana, 1989, pp. 29-33.
- 31) Muñoz Camargo, *Historia de Tlaxcala*, 1998, p. 75.
- 32) *Ibid.*, p. 94; Zapata y Mendoza, *op. cit.*, p. 88.
- 33) Townsend, “Don Juan Buenaventura Zapata y Mendoza and the Notion of a Nahua Identity”, 2010.
- 34) Armando Díaz de la Mora, “Zapata y Muñoz Camargo: una fuente común”, *Tlahcuilo. Boletín del Archivo Histórico del Estado de Tlaxcala*, vol. 2, núm. 8/9, 2009, pp. 67-76.
- 35) Wolfgang Trautmann, “Cambios sufridos por los sistemas de asentamiento de lugar central en Tlaxcala después de la conquista”, en Ángel García Cook y Beatriz Leonor Merino Carrión (compil.), *Antología de Tlaxcala*, vol. IV, México, INAH/Gobierno del Estado de Tlaxcala, 1997, pp. 39-51.
- 36) Zapata y Mendoza, *op. cit.*, pp. 106-107, 130-131.
- 37) *Ibid.*, pp. 38-44; Alfredo Chaverro, “Anónimo mexicano”, *Anales del Museo*

*Nacional de México*, Primera época, tomo VII, 1903, pp. 115-132.

<sup>38)</sup> Zapata y Mendoza, *op. cit.*, pp. 41-42.

<sup>39)</sup> *Ibid.*, pp. 176, 190, 208-210. トラスカラの統治官となった記録者ムニョス・カマルゴの息子については、以下を参照。Muñoz Camargo, *Historia de Tlaxcala*, 1998, pp. 9-23; Yukitaka Inoue Okubo, “Pomar y Muñoz Camargo en el contexto histórico-historiográfico de la Nueva España, *Históricas –Boletín del Instituto de Investigaciones Históricas, UNAM*, núm. 66, 2003, pp. 6-7.

<sup>40)</sup> Zapata y Mendoza, *op. cit.*, pp. 208-210.

<sup>41)</sup> *Ibid.*, pp. 308, 324.

<sup>42)</sup> *Ibid.*, p. 312.

<sup>43)</sup> *Ibid.*, p. 604.

<sup>44)</sup> *Ibid.*, p. 681.

<sup>45)</sup> 井上幸孝「メキシコ盆地における自然現象と災害の歴史記録」、『専修人文論集』第93号、2013年、29～54頁。

<sup>46)</sup> サバタ自身が『年代史』を書いていた同時代の災害や自然現象についても記録があり、川の決壊や地震などが記述されている。Cfr: Zapata y Mendoza, *op. cit.*, pp. 524-526, 536, 588.

<sup>47)</sup> Townsend, *Here in This Year*, 2010.

<sup>48)</sup> Limón Olvera, “Los códices transcritos...”, 2003, p. 85.

<sup>49)</sup> Cristóbal del Castillo, *Historia de la venida de los mexicanos y de otros pueblos e Historia de la conquista*, ed. de Federico Navarrete Linares, México, CONACULTA, 2001; Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*, ed. de Edmundo O’Gorman, México, IIH-UNAM, 1985, 2 tomos.

<sup>50)</sup> Zapata y Mendoza, *op. cit.*, pp. 224, 276.

<sup>51)</sup> *Ibid.*, p. 79.

<sup>52)</sup> Lockhart, *op. cit.*, p. 555.

<sup>53)</sup> *Ibid.*, p. 557.